

特集 共生科学再考—ウィズコロナ時代の「共生科学」とは

## 新型コロナウイルス感染症拡大における体育実技系授業の 取り組みと今後の可能性の検討

高木 由起子・渋谷 聡

### 1. 新型コロナウイルス感染症拡大のはじまりと星槎大学の取り組み

#### 1) 星槎大学としての取り組み

新型コロナウイルス感染症の拡大（以下、コロナ禍）により、2020年4月7日に政府から緊急事態宣言が発出され、不要不急の外出の自粛が要請された。教育現場においては、この1か月前から臨時休校が政府から要請され、対面による授業が数か月にわたり実施できなくなった。

こうした中、星槎大学（以下、本学）は、通信制課程の特徴を生かし、2020年2月29日からの対面のスクーリング（授業形態の1つ、以下SC）をオンライン（Web会議ツールZoomを使用）受講として限定的に開講し、同年3月の学位記授与式や同年4月の入学式もオンラインで実施した。

コロナ禍が1年以上終息しないことを想定した本学では危機管理対策本部が設置され、2020年4月8日に「星槎大学における新型コロナ感染防止のための危機管理レベルについて」、同年4月10日に「【学生用】星槎大学共生科学部スクーリング開講に関するガイドライン」がホームページに記載された。その後、2020年4月に全教職員を対象とした4回ものオンライン授業の研修を行い、同年5月からほぼ全ての開講科目でオンラインSCを実施している。

#### 2) 体育実技系授業の取り組み

2013年4月から通信制の大学で唯一、保健体育教員を養成している本学は、SC実施会場と担当教員の調整により次年度のSCスケジュールが決まる。学生は、このSCスケジュールを参考に、当年の学修計画を立ててから履修登録を行い、SCを受講して単位修得に至る。

文部科学省は、2020年6月5日に示した「大学等における新型コロナウイルス感染症への対応ガイドラインについて（周知）」において、できるだけ対面による体育実技の実施時期を遅らせることを推奨した。しかし、本学において、同年4月時点で全科目がオンラインSCに移行することが決定したことから、すでに体育実技系科目のSCスケジュールの一部が学生に提示され、SCの受付が始まっていた。本学の学生は、通信制課程を生かして普段仕事をしながら学修を進めている。このような状況で、2020年度に学位取得（卒業）を目指している学生や保健体育の免許取得を希望している学生にとって、12科目にも及ぶ体育実技系必修科目のSCを半年間延長し、残りの半年間で全ての単位を修得することはほぼ不

可能である。なお、本学で開講している体育実技系科目のSCは、主に土日で開催され、1回のSCの多くは2日間から4日間で受講しなければならない。

そこで、コロナ禍においては、卒業あるいは保健体育免許状が必要な学生が体育実技系科目の学びを続けるために、オンラインによる実技のSCを実施することを選択した（一部、本学の定めた危機管理ガイドラインに則り、対面SCとオンラインSCを同時に開催するハイブリッドSCも行われた）。

体育実技系科目のSCにおけるオンラインSCを実施するにあたり、まず、2020年3月に本学から文部科学省に対して、学修の現状を数回にわたって報告した。その後、2020年4月17日に文部科学省総合教育政策局教育人材政策課による「令和2年度における大学・専門学校等の教職課程等の実施に関するQ & Aの送付について（4月17日時点）」や、文部科学省高等教育局大学振興課による「遠隔授業等の実施に係る留意点及び実習等の授業の弾力的な取扱い等について」を踏まえ、再度体育実技系科目のSCのオンライン化について、文部科学省と複数回にわたってやり取りをした。オンラインSCで実施する実技動画の提出やSC内容の説明を行った後に、特例措置対象学生に限定すること、実技としての性格を損なわないこと、教育効果を担保することに留意することで、体育実技系科目SCのオンライン化が実施可能となった。

上記結果を受けて、2020年5月に本学体育実技系科目担当教員と複数回の打ち合わせを行い、科目主担当教員を中心としたオンラインSCの内容を作成した。この内容に合わせて、動画による課題提出や実技テスト内容の再検討を行った。

### 3) 体育実技必修科目「体づくり運動」におけるオンラインSCの紹介

ここでは、これまで実施していた体育実技系必修科目である「体づくり運動」の対面SCと、コロナ禍で実施することとなったオンラインSCを紹介する。

#### (1) 学習指導要領保健体育編の紹介

中学校及び高等学校の新学習指導要領保健体育編（2017,2018）において、体づくり運動は、体ほぐしの運動と体の動きを高める運動で構成され、その学習内容は、知識及び運動、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等という3つの資質・能力を身に付けることが示された。体ほぐしの運動においては、中学校及び高等学校の学習指導要領によると「心と体は互いに影響し変化することに気付き、仲間と積極的に交流するための手軽な運動や律動的な運動を行うこと」を目標にしている。また、体の動きを高める運動における目標は、中学校の学習指導要領によると「中学校1・2学年では『体の動きを高める運動』、第3学年では『実生活に生かす運動の計画』」に変更され、高等学校では、「体力の必要性を認識し、『実生活に生かす運動の計画』」に改訂された。これによって、体ほぐし運動のねらいは「気づき」「関わり合うこと」とされ、体の動きを高める運動において、「体の柔らかさ」「巧みな動き」「力強い動き」をねらいとした。

#### (2) 体づくり運動における対面SCとオンラインSCの比較

本学の対面SC（同時双方向）として実施している内容を、以下の表に示した（表1）。

表1 体づくり運動における対面 SC 内容 (3日間用)

	1日目	2日目	3日目
午前	・ガイダンス、自己紹介	・ダブルダッチ構成案 (GW)	・ボールを使った運動
	・新学習指導要領の位置付け	・ブラインドウォーク	・道具を使った運動
	・体づくり運動の意義	・ゴールボール準備	・ダブルダッチ練習
午後	・アイスブレイク	・ゴールボール	・ダブルダッチ発表会
	・新聞紙を使った運動	・ダブルダッチ練習	・スポーツ鬼ごっこ
	・ダブルダッチ練習		・SC 修了試験

次に、コロナ禍によって2020年6月末から実施している体づくり運動のオンライン SC を以下に示す (表2)。

表2 体づくり運動におけるオンライン SC 内容 (3日間用)

	1日目	2日目	3日目
午前	・ガイダンス、自己紹介	・障害について	・LGBTQ について考える
	・新学習指導要領の位置付け	・ブラインドウォーク	・組み立て体操 (動画視聴)
	・体づくり運動の意義	・ゴールボール (動画視聴)	・ダブルダッチ (動画視聴)
午後	・アイスブレイク	・肢体不自由・聾者の生き方(動画視聴)	・スポーツ鬼ごっこ (動画視聴)
	・新聞紙を使った運動の教材開発	・障害のある子どもたちとの体育の授業を 考える (教材開発)	・道具を使った運動の教材開発
	・ボールを使った運動の教材開発		・SC 修了試験

オンライン SC と対面 SC の違いは、実技 (身体活動) に制限がかかることである。特に、オンライン SC は対面 SC に比べ、2名以上で行うワークや広いスペースでの活動ができない。そうした中で、この科目におけるオンライン SC は、上述した対面 SC と同様に実技としての性格を損なわないこと、教育効果を担保することを留意する必要がある。そこで、体づくり運動におけるオンライン SC では、4つの到達目標を掲げた。まず1つ目は体づくり運動の意義を理解すること、2つ目にグループワークを通して主体的・対話的・深い学びを実践すること、3つ目に ICT 授業だけではなく、運動を苦手とする生徒に対する学習の過程 (知る、気づく、わかる、できる) を段階的に指導すること、4つ目に今後数年間にわたるコロナ禍にも対応した教材開発をすることとした。

体づくり運動のオンライン SC において、これらの目標に到達するために、以下のような取り組みを行った。

①オンライン SC における取り組み：オンラインの特性を生かす

オンライン SC の初日に実施しているアイスブレイクでは、ジェスチャーゲームを取り入れた。これは、ウェブ会議ツールである Zoom を使用し、全受講者が画面オフの状態から科目担当教員がある受講者のみにチャット (コメント) 機能を活用してお題を伝える。次に、それを受け取った受講生は、画面をオンにして他の全受講者 (画面オフ状態) に対してジェ

スチャーをする。そのジェスチャーが何を表現しているのかを予測できた受講生は、画面をオンにする。初めに画面がオンになった受講生が解答権を得て、ジェスチャーの解答をする。このような取り組みは、本学スポーツ身体表現専攻の名称にも使用されている身体表現によって、Zoom というオンデマンドツールを活用してコミュニケーションをとる方法の1つである。このように、オンラインという限られた環境に苦慮するのではなく、オンラインの特性をうまく生かしていくことを心がけている。

## ②オンライン SC における取り組み：グループワークの回数を増やす

対面 SC の2日目の内容に、一人ひとりの発達状況や身体の状態に適合 (adapt) させたアダプテッドスポーツを組み込んでいる。これは、新たな学習指導要領において、中学校及び高等学校では「障害のある生徒の指導における配慮事項」(p.233, p.223) として「個々の生徒の障害の状態に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと」が新たに示されたためである。この背景には、文部科学省 (2012) が「インクルーシブ教育」の推進に力を入れ、障害のある子どもが十分に教育を受けられるための合理的配慮及びその基礎となる環境整備を実施していることが考慮されていると考えられる。現在、中学校及び高等学校では、通常学級や支援学級といった多様な学びの場が充実されつつあることから、障害のある生徒に対する指導内容の工夫を組み込んだ指導法が必要であり、障害の有無に関わらず、生徒同士が尊重し合う共同学習が求められていると考える。

オンライン SC において、アダプテッドスポーツであるゴールボールを体験する(“わかる” “できる” という学び) ことはできないことから、動画の視聴による “知る” “気づく” 学びに切り替えた。ブラインドウォークは体育館ほど広範囲に動くことやパートナーと協力することはできないが、安全に配慮 (ゆっくり動くことや不安を感じたら目を開けること等) しながら自宅によるブラインドウォークを体験した。その後、グループワークを実施することによって、受講者は体育授業における障害のある生徒への配慮や、道具やルールの工夫を検討する機会となった。

次に、SC 最終日の午前中において、対面による各種運動を実践するかわりに「LGBTQ について考える」時間を設けた。これに着目した理由は、2016年に文部科学省が「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について (教職員向け)」の資料が公開されたからである。これによると、文部科学省は、2014年に「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」を行なっている。その結果から、606件の相談件数があったことがわかり、全体の66.5%が高等学校であった。続いて、小学校が15.4%、中学校は18.2%となっている。このような状況を踏まえて、体づくり運動の受講生の多くは、中学校及び高等学校の保健体育の免許取得を希望していることから、このオンライン SC において議論することで、今後の教育現場でこの問題に直面した際に、スムーズな対応ができると考えられる。実際、配慮が必要な場面として、更衣室、トイレ、体育または保健体育授業、水泳、運動部での活動が挙げられる。本来、LGBTQ の問題は人権教育の中で扱うべき内容であるが、性教育の大部分は小中高の保健 (体育) で扱われること、また体づくり運動は年度の初めに行われる科目でもあることから、この問題をこの SC で取り

上げることは包括的な学びとして必要だと考えられる。

上述した通り、中学校・高等学校の新たな学習指導要領における保健体育には、知識及び技能（体づくり運動は知識及び運動）以外にも、思考力・判断力・表現力等と学びに向かう力・人間性等の3観点を習得、あるいは向上することが必要である。オンラインSCによって実技時間に制限があるかわりに、様々な話題を提供してグループワークをすることによって、思考力・判断力・表現力等と学びに向かう力・人間性等を向上させる機会を増やすことは、体育実技における教育効果を担保することにつながったと考えられる。

### ③オンラインSCにおける取り組み：新たな教材開発

オンラインSCの受講環境を考えると、自宅の昼一昼分の範囲でしか動けないことが多いことから、それに合わせた教材の選択あるいは開発が必要となる。このような状況においてオンラインSCに変更になったことを生かし、新聞紙やボールなどいくつかの道具を使った授業作りをグループでディスカッションし、その成果を全受講者の前で発表してもらった。ここで重要なことは、障害のある生徒や運動が苦手な生徒も参加できるようにルールや道具を工夫することによって、できない生徒が置き去りにならないための全員参加型の授業を作ることである。このような取り組みを通して、新たな教材を開発し、それを全受講生で共有することによって、今後の教育現場における体育授業に生かすことができる。

### (3) 体づくり運動におけるオンラインSCの振り返り

オンラインSCにおける学びの成果として、受講生が提出した振り返りシートの一部を表3に示した。

オンラインSCを始めるにあたり、対面SCと違って受講者同士が仲間と組んでバランスを保持することや、仲間と力を合わせて用具を移動させるなどの運動ができないことから、他者との関わりが難しいと考えていた。しかし、オンラインSCにおいて、受講者が互いに助け合い高め合おうとする運動のかわりに、グループワークやディスカッションを設けたこ

表3 体づくり運動におけるオンラインSC受講者の振り返りシート(一部抜粋)

A	実際に動くことができなくてもゲームや遊びを考えたり、グループディスカッションで多くの人と話すことができた。
B	障害スポーツの講義では、終始考えさせられた。障害のある人の日常生活がどういったものなのか、自分が想像した数倍大きな悩みを抱えているのか、体育授業も考えていきたい。
C	LGBTQについて考えたが、最善の選択への決定には結論に至らなかった。まだ世間の認識にも時間がかかると感じた。
D	車椅子の生徒と知的障害の生徒と一緒に体育授業に参加した時のことを考えた授業づくりでは、色々な組み合わせが考えられるため、柔軟な考えを持っておきたい。
E	Zoomでは、色々な問題について深く考えることができ、教員に必要な考え方を養えたと思う。

とによって、受講生の思考力・判断力・表現力等や学びに向かう力・人間性等を学ぶ機会を設けることができた。これは、教育効果を別の視点から担保するという側面から、オンライン SC を実施したことによる新たな発見であった。また、障害のある生徒がいる場合の体育授業を考えることによって、受講者は教育現場で発達障害や情緒・精神障害、知的障害の生徒が通級に在籍しているという知見だけではなく、体育授業の創意工夫まで考える機会を設けた。つまり、“知る”という学修だけではなく、“気づく”ことや“わかる”という学びにまでつなげることができたと考えられる。LGBTQ の問題を教材として取り上げたことも同様のことがいえる。グループディスカッションをすることによって、ただ単に LGBTQ のことを“知る”だけではなく、他者との関わりから“わかる”という学びにつなげることができた。このことから、オンライン SC をきっかけとして教育現場における実践的な学びを深める（指導法を体験する）良い機会になったと考えられる。

受講生が提出した振り返りシートから、学修内容について検討していく。受講生 C は、振り返りシートにおいて「結論に至らなかった」と記述していた。“わかる”という学びは、課題に対する一定の解答を導くことはできるが、必ずしも正解に至るとは限らない。あるいは、正解がない問いに対して各受講者なりの考えを導く機会となる。他の受講者の振り返りからも、“考える”というキーワードが見られた。技能の習得や複数人で実施するワーク（共同活動による学習）では、しばしば“できた”あるいは“できなかった”という結果に対する視点で答えることがある。ここでは、“わかる”ことや“気づく”といった思考力に対する記述が多かったことから、体づくり運動を目的とした学びというよりも、体づくり運動を手段とした学びの成果が表れていると考えられる。

以上のように、対面 SC の学修内容を基本とし、オンライン SC の良さを生かした内容を実践し、振り返りを行ってきた。オンライン SC は対面 SC のように他の受講生と身体活動を通じた学修の機会が減少することは、ある程度しかたのないことであろう。しかし、そのかわりとして思考力・判断力・表現力等や学びに向かう力・人間性等の学びを深めることができたと考えられる。これは、文部科学省のいう実技としての性格を損なわないこと、教育効果を担保することに留意して SC を実践することができたと考えられる。

## 2. 体育実技系科目 SC における今後の可能性について

ここでは、上述した体づくり運動におけるオンライン SC の取り組みだけではなく、他の体育実技系科目の振り返りを踏まえて、今後の体育実技系科目 SC の可能性について述べていきたい。

### 1) バレーボールにおけるオンライン SC の「振り返りシート」による振り返り

体育実技系科目の特徴は、同時双方向による実技指導によって、受講者が技能（体づくり運動は運動）を習得することであろう。ただし、オンライン SC になったことによって、この習得や対面による実技ができないことに対する不満が出てくることが予想される。そこで、

ここでは著者の1人である渋谷が担当したバレーボールのオンデマンドSCで実施した振り返りシートをまとめた表4をもとに、上記課題について振り返る。

表4 バレーボールにおけるオンラインSCのコメント数、内訳

	受講者数	SC1日目の振り返り				SC最終日の振り返り			
		対面実技を希望するコメント	オンデマンドSCになったことによるメリット			対面実技を希望するコメント	オンデマンドSCになったことによるメリット		
			技能について	グループワークについて	その他		技能について	グループワークについて	その他
1回目	13名	6件	4件	6件	0件	3件	1件	13件	4件
2回目	7名	0件	0件	0件	3件	0件	2件	2件	1件
3回目	13名	0件	1件	0件	3件	0件	1件	2件	0件

バレーボールは、集団スポーツであることから、オンラインSCでは当然試合や対人パスなどの集団活動は行えない。それができない分、オンラインSCにおいて動画による視聴と図解による説明、バレーボールの授業で起こり得る生徒対応についてグループワークを多めに行った。

この振り返りシートは記名式であり、受講者自身の学びを振り返る目的で実施していること、すでにオンラインSCであることが事前にわかった状況で受講していることから割り切って受講している可能性は十分考えられる。これらの点を考慮した上で、バレーボールにおけるオンラインSCの振り返りを行っていききたい。

今回は3回のSCを対象としたが、受講者は1回の授業を3日間あるいは4日間受講することとなっている。そのため、1回から3回の受講生は全て違うということを書いておく。

1回目のオンラインSCにおいて、1日目の振り返りシートで対面SCを受講したかったという意見が6件認められた。一方、オンラインSCによるメリットについて述べている意見のうち、技能についてのコメントが4件、グループワークについて肯定的なコメントが6件であった。オンラインSCにおいて技能に対するコメントは、パスの導入としての風船や柔らかいボールの有効性がほとんどであった。風船を使った道具の工夫は、対面SCでは行ってこなかったことから、オンラインSCを実施したことによる成果だと考えられる。最終日の振り返りシートにおける対面SC希望意見は3件であり、オンデマンドSCにおける肯定的な意見が18件であった。依然として、対面SCに対する希望は残った(3件)ことは、SCの1か月前まで対面SCの可能性を残していたことが、この結果になったと考えられる。これは、2回目と3回目のSC振り返りシートにおいて、対面SC希望のコメントがないことも裏づけとなっている。つまり、同じタイミングで1回目から3回目のSCがオンラインになったと受講生に伝わったため、時間の経過によって気持ちを切り替えることができたのではないかと考えられる。SC初日に比べ、グループワークにおける学び(13件)や、オンラインSCそのものに対する肯定的な意見(4件)が増えていた。特に、グループワークに

関する肯定的なコメントが2倍に増えたことから、オンライン SC によって複数名での活動ができなかったかわりとしてグループワークによる思考力・判断力・表現力等や学びに向かう力・人間性等の学修を増やした成果が反映していると考えられる。これは、文部科学省のいう教育効果を担保することができたのではないかと考えられる。また、オンライン SC に関する肯定的なコメントが増えたことは、一部であるかもしれないが“体育としての性格を損なわない”ための取り組みが実践できたのではないかと考えられる。

2回目及び3回目の1日目のコメントのうち、その他の内容がオンライン SC に対する肯定的な意見や感想であった。最終日になるとグループワークの肯定的なコメントが増えたことから、1回目ほどではないものの、ここでも教育効果がある程度担保されたと考えられる。

## 2) コロナ禍による体育実技系科目オンライン SC で学んだこと

### (1) 同時双方向による学び以外の学修形態の可能性

コロナ禍において、バレーボールや陸上、保健体育科指導法Ⅲのオンライン SC では、担当教員の実施環境の制限や画角の問題などで、ライブで実技の見本を示すことが難しいことから、受講生に対して実技の課題動画を提供し、視聴した受講生が成果物（動画など）をオンライン SC で提出するという一部双方向による（同時双方向ではない）学修を実施した。これまでの対面 SC は同時双方向のみで実施してきたが、コロナ禍におけるオンライン SC を振り返ることによって、双方向による学修の可能性を見出すことができた。このことは、短期間での SC による技能の習得に限界があるという本学の課題を解消することができることを意味する。通常、通学制の大学における体育実技は、1週間に1回開講されることから、技能習得に費やすことのできる期間は10週以上ある。それに対して、本学の体育実技科目の SC は3日間あるいは4日間連続で実施する。そのため、これまでの対面 SC では初日に技能の到達目標（実技テストの課題）を提示し、最終日にその成果を実技テストで評価していた。この場合、受講生がある一定の技能習得に与えられた期間は最短だと2日しかないことになる。SC が週末のみで実施された場合でも、受講者の技能習得に費やす期間は平日の5日間のみである。これを、オンライン SC をきっかけとして、受講生に対して事前に実技の課題動画を提示することによって、SC までに技能を向上する期間を十分設けることができる。

### (2) 様々な教材開発

オンライン SC における受講者の技能を向上させるにあたり、様々な道具などを使った教材の開発が必要となった。例えば、バレーボールと体づくり運動のオンライン SC では、どちらも新聞紙を丸めてボールを作成した。しかし、バレーボールにおいてパス練習をする際、ボールが天井に触れると連続パスが難しいことから、ボールを柔らかく、かつ軽くして弾みすぎないように工夫が必要である。一方、体づくり運動で使用するボールはある程度重みや弾みを必要としたことから、丸めた新聞紙をテープで十字に巻くという工夫を行った。これは、同じ道具であっても科目の特性や実技の目的による違いがあることを示し、オンライン SC を実施しなければ気づかなかったことである。



### (3) ICT 教育に合わせた指導法

オンライン SC において、対面 SC と違って同じ空間で全受講者の行動を 1 つの視界に入れることは難しい。これは、科目担当教員の見本動作をライブで受講者に見せることや、受講者の動きをライブで確認することが難しいことを意味する。そのため、オンライン SC では、上述した通り、事前に見本の動画を撮影して学生に視聴させることや、受講者の実技の成果をスマートフォンなどで確認するなどの工夫が必要となった。その際、見本のどこに注目させるかを事前に決めてから撮影する向きや画角を調整することが重要であった。また、受講生の提出する動画も撮影する動作の範囲を指定する必要がある。このように、ただ撮影をすればよいのではなく、何をどのように指導する、確認するかという目的を明確にした上で、ICT を活用することが重要である。

ICT の活用という側面から、オンライン SC 受講そのものも教育となる。上述したオンライン授業スキル研修において、Zoom の活用を 3 つのステップに分けて段階的に実施した。特に、授業を実施するための留意点として、最低限必要なミュートや画面のオンオフ、画面上で○や×などを示すなど約束事を事前に決めておく必要がある。その上で、通信機器というツールのもつ特性を生かした授業づくりを進めていくことが重要となる。

本学が Zoom を使用しているのにはいくつか理由がある。その 1 つに他のウェブ会議ツールにはないブレイクアウトセッションという機能が Zoom にはある。これは、1 つのアカウントからいくつものルームを作成し、一人の教員によってグループワークを同時に行うことができる。体育実技系科目のオンライン SC では、この機能を用いてグループワークを有効に行うことができたことが、教育効果を担保できた理由の 1 つであることを付記する。

コロナ禍によって、教育機関による GIGA スクールの普及が急務となっている。しかし、ただ導入するだけでは、ICT 教育とはいえない。ICT はあくまでもツールであることから、教育の目的を明確にした上で、必要な機能を必要なタイミングで使用してこそ意味をなすのである。

### (4) 自宅受講による留意点

すでに述べている通り、オンライン SC の受講者のほとんどが、自宅から受講している。当然、自宅は生活をする場であって運動する場所ではないことから、いくつかの点に留意する必要がある。

まず、運動するスペースがあまり取れないということは前掲の通りである。著者たちのオンライン SC では、1~2 m 四方で行える実技を実施していた。また、天井が高くないことからボールなどを挙上させるための安全配慮を事前に検討した。

次に、自宅がマンションやアパートの場合、下の階へ音が漏れる、あるいは振動が響く可能性があることから、受講生がジャンプや床に力を入れる動きが制限されることを考慮した。例えば、ジャンプではなく膝の屈伸のみに行ったり、ジャンプや速い全身運動を伴う場合、自宅の外で安全に行うスペースを確保することを受講生に勧めた。それでも難しい環境の場合は、指定した動作を一部実施しないように受講生へ伝えた。

最後に、オンライン SC において受講者はパソコンやタブレット、スマートフォンなど様々

な通信機器で受講していることから、受講者の動作をライブで担当教員が確認することができないことがある。その場合、スマートフォンやタブレットで動画を撮影（自撮り）し、ライブ（同時双方向）あるいはメール（双方向）などで動きを確認することとした。

このように、オンライン SC は、対面 SC とは違う環境であることを事前に把握し、考えられるあらゆる準備を行うことが重要である。

### 3) 今後の体育実技系科目 SC に生かすこと

これまで述べてきた通り、コロナ禍によって、本学の体育実技系科目が対面 SC からオンライン SC へと移行した。今後、新型コロナウイルスの感染が終息したとしても、体育実技の学びはコロナ禍以前に戻ることはない。このオンライン SC で得た様々な学びを通して、未来の学修方法や学修環境につなげていく必要がある。そのためには、オンライン SC を実施するにあたり文部科学省が求める2つの留意点を満たしつつ、本学としての特徴を最大限生かした学びを以下のように進めていく。

#### (1) 「実技としての性格を損なう」ことへの対応について

体育実技系科目の対面 SC がオンライン SC に移行するにあたり、“実技としての性格を損なうことがないよう”な教育をしていく必要がある。しかし、オンライン SC を実施するにあたり、広い場所や複数人での活動の制限がかかる。そうした中で、自宅という限られたスペースであっても道具の工夫や ICT の活用、同時双方向だけではなく双方向の学修を取り入れることによって実技を実践していきたい。

#### (2) 「教育効果を担保すること」への対応について

中学校・高等学校学習指導要領において、体育実技で身に付ける必要のある資質・能力は、知識及び技能（体づくり運動では知識及び運動）だけではなく、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等の3観点である。保健体育教員を養成する課程を有している本学は、体育実技で身に付ける必要のある資質・能力を実践して学ぶ必要がある。オンライン SC を実施するにあたり、対面 SC よりも場所や複数人で行う実技の制限があるのは当然であるが、そのかわりとして技能以外の資質・能力を同時双方向や双方向の学びを通して高めていきたい。

本学は、通信制課程で唯一保健体育教員を養成している大学である。それは、つまり通信制の本学でしか保健体育教員の免許を取得できない（ニーズに合った）学生に対して、通信制の学びの特徴や共生の視点を踏まえ、共生社会を目指す教員を養成するという使命がある。今後も、この使命感や責任を十分に自覚しながら保健体育教員の養成に邁進していきたい。

## 引用文献

文部科学省. (2012). 「インクルーシブ教育システムについて」.

[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/other/detail/\\_icsFiles/fieldfile/2015/06/16/1358945\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/_icsFiles/fieldfile/2015/06/16/1358945_02.pdf) (2020年11月28日閲覧).

文部科学省. (2016). 「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け）」.

[https://www.mext.go.jp/content/20201023\\_mxt\\_sigakugy\\_1420538\\_00002\\_007.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201023_mxt_sigakugy_1420538_00002_007.pdf) (2020年11月29日閲覧).

文部科学省. (2017). 「中学校学習指導要領解説」.

文部科学省. (2018). 「高等学校学習指導要領解説」.

## 参考文献

藤原直子. (2016). 「LGBT の子どもたちに必要な体育・部活動での配慮」, 体育科教育, **8**, pp24-27.

橋本紀子. (2016). 「LGBT 教育の内容とは何か、それをどこで扱うか」, 体育科教育, **8**, pp20-23.

中塚幹也. (2016). 「いま、学校で LGBT を教えることの意味」, 体育科教育, **8**, pp16-19.

関明穂. (2016). 「LGBT の子どもたち－あなたのクラスも無視できない－」, 体育科教育, **8**, pp12-15.

首相官邸. 「新型コロナウイルス感染症対策本部（第27回）」.

[https://www.kantei.go.jp/jp/98\\_abe/actions/202004/07corona.html](https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/202004/07corona.html) (2020年11月30日閲覧).

首相官邸. 「新型コロナウイルス感染症対策本部（第15回）」.

[https://www.kantei.go.jp/jp/98\\_abe/actions/202002/27corona.html](https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/202002/27corona.html) (2020年11月30日閲覧).

星槎大学ホームページ. 「星槎大学における新型コロナ感染防止のための危機管理レベルに関するお知らせ」.

<http://seisa.ed.jp/seisanews/index.php/category/seisaacnews?page=3> (2020年11月30日閲覧).

星槎大学ホームページ. 「(改訂版)【学生用】星槎大学共生科学部スクリーニング開講に関するガイドライン」.

<http://www.seisa.ac.jp/about/images/0411info.pdf> (2020年11月30日閲覧).